

戦前・戦中の教科書教材としての中勘助作品の位置づけ

— 全集未収録短歌紹介を含む —

The Thought on Naka Kansuke's Works as Study Materials on National Schoolbooks Pre & during Sino - Japanese War

木内英実

Hidemi Kiuchi

要旨：

中勘助（一八八五～一九六五）の文学作品は一九二八年から教科書に採択されてきた歴史を有する。本稿では、戦後の教育実践との比較を視野に入れ、戦前・戦中の中勘助文学作品の教科書教材における位置づけ並びに本文テキストの正確な読みを探究する目的のもと、国立教育政策研究所教育図書館「近代教科書デジタルアーカイブ」の旧制中学校国語教科書に収録された中勘助の文学作品を一覧化し本文異同を確認した。その結果、『中勘助全集』（第一四巻 詩歌）未収録短歌二首が教材化されていることを発見した。これら作品の教科書採択の背景には、中勘助文学作品に通底する自然の頌歌、原始的な歓喜を描いた点、純真な童心を表現した点、心の故郷に対する思慕を深らしめる点が挙げられた。

キーワード：中勘助 教科書 「銀の匙」 日記体随筆 短歌

一 はじめに

中勘助の作品を用いた教育実践に関して、言うまでもなく戦後に
ついでには灘校国語科教師であった橋本武の実践が著名であり、菅原
稔は「戦後国語教育実践についての研究―橋本武の灘中学における
『銀の匙』（中勘助）の指導実践を中心に―」（岡山大学大学院教育
学研究科研究集録）（第一六一号）（二〇一六年）において橋本の実
践に言及した平野啓一郎、黒岩祐二、十川信介、伊藤氏貴、橋本自
身による著書をもとに橋本の国語教育観、いわゆる「銀の匙」授業

の成立過程、スロリーディングという方法等について考察した。
橋本の実践の根底には終戦直後の黒塗り教科書への否定があったと
菅原は指摘した。筆者はそもそも戦前・戦中から中勘助の作品の教
科書教材としての採用及び教育実践はあったのだろうかという疑問
から「教科書教材としての中勘助文学作品について」（『日本女子大
学大学院の会』会誌）（二〇一九年一〇月）を発表した。そこでは、
関係する国会図書館、国立教育政策研究所教育図書館及び神奈川県
立総合教育センター内教科書センター所蔵資料を可能な限り目視
し、戦前・戦中・戦後の教科書収録中勘助作品の検証を行った。

その結果、中勘助の教科書教材化の契機として、①作品の本文テキストが、単行本としての作品の出版を通して早いものでは一九二〇年代に定稿化したこと②第二次世界大戦時下における岩波文庫版「銀の匙」陸軍恤兵部による買い上げに伴い中国大陸の戦線兵士に送られた軍需品であったことを証左とする「国民文学」化したことが大きな影響を及ぼしたと論じた。中勘助作品の教科書採択が結果的に広範かつ確実な読書層の獲得に繋がり、二〇一七年の筑波大学附属中学校に於ける齋藤孝による「銀の匙」特別授業を始め、^①「新編国語Ⅱ」(改訂版)(筑摩書房、一九九八年)収録「銀の匙」、^②公文式読書教材「ひばりの話」^③・同国語教材GⅠ・91〜100「銀の匙」など現代でも国語教材として扱われるに至ることは言うまでもないだろう。^④

二〇二〇年一〇月に平塚市中勘助を知る会の会員より、中勘助の連作童話『鳥の物語』収録「雁の話」に関連して、「雁」のルビについて問い合わせがあった。岩波文庫『鳥の物語』一九八三年発行第一刷においては「かり」とルビが振られているものの二〇一四年発行第二七刷では「がん」とルビが振られている。このルビ変更の理由について調査した結果、先掲「教科書教材としての中勘助文学作品について」表2「中勘助文学作品の戦後教材一覧」収録「つるの話」『中学校国語』(一下)(学校図書、一九五四年)にその答えが見つかった。「鶴の話」の角川書店版・岩波書店版『中勘助全集』(第三巻)のテキスト「自分たちにならって白鳥も雁鴨もみな旅だちを見合せてをりますと申上げました。」を同教科書では「自分たちにならって白鳥もがんかもみな旅だちを見合せてをりますと申しあげました。」として収録している(傍線筆者)。これは、同教

科書編集者が当時存命していた中勘助に同教科書掲載作品文章(中学生向けに編集したもの)を確認しているであろうという推測に加え、生涯、中勘助と親しく交流した志賀直哉が同教科書監修者であることから、更にその推測の現実性は高まったといえよう。

以上のように定稿化した本文テキスト中の難語句や漢字にルビや註が少ない中勘助文学作品に関して、教科書の文章表記を確認することがその本文テキストの正確な読みに繋がるということが判明したため、本稿では更に教科書教材作品について本文テキストとの異同を中心に確認し、その位置づけについて論じていきたい。冒頭で述べた戦後の教育実践との比較を視野に入れ、本稿では戦前・戦中の教科書教材を取り上げる。

二 方法

先掲「教科書教材としての中勘助文学作品について」収録表1「中勘助文学作品の戦前教材一覧」の完成度を高めるため、国立教育政策研究所教育図書館「近代教科書デジタルアーカイブ」検索機能を用い、表1「改訂版 中勘助文学作品の戦前教材一覧」の通り、改めて旧制中学校教科書教材に採択された中勘助文学作品一覧を作表した。現物の教材を目視し、時系列的に「教材名」、「教科書名」、教科書の書誌情報、出典元の書誌情報、①文章省略など大きな本文異同の有無、②ルビ加筆の有無、③漢字表記からひらがな表記への修正、④注加筆の有無、⑤挿絵の有無について整理した。尚、①本文異同③ひらがな表記への修正について、表記の原則は「出典の本文↓教科書の本文」とし、「∴してゐる↓∴してゐる」∴してゐた↓

…してた」「…であつた↓…だつた」、接続詞・助詞の類を平易なものに修正したこと、句読点を整理したこと、音引（〜・〜）を用いたこと、外来語をカタカナ表記にしたこと等は全文を通しての訂正が多いため、特記すべき場合を除いて省略した。また④注加筆において作者の解説注は除外した。本文異同の底本は原則として出典としたが、場合によっては岩波書店版『中勘助全集』を参考にした。

三 結果

コロナ禍によって来館利用に制限が生じたため、二〇二〇年一月七日より国立教育政策研究所教育図書館「近代教科書デジタルアーカイブ」において旧制中学校国語教科書の作品検索（作品名・作品著者名）ができるようになった。そのお陰により先掲「教科書教材としての中勘助文学作品について」収録表1「中勘助文学作品の戦前教科書教材一覧」に示された教材が一〇件であったものが、今回一四件と四件増加した。次に時系列的に教材を配置し、その詳細を見ていく。

(一)「田園の二日」『昭和国語読本』〈巻一〉帝国書院、一九二八年

九月

出典『沼のほとり』（岩波書店、一九二五年七月）

①文章省略など大きな本文異同

「裸足で遊んでゐる子供が野生を帯びて濁つた声で↓裸足で遊んでゐる子供が、野生を帯びた濁つた声で」

「お母さんなる嫁さんは針仕事をしながら↓お母さんは、針仕事をしながら」

「まへの綿畑には荒い紺飛白をきて手拭をかぶつた女たちが這ふやうな恰好をして草をとつてゐる。肘までむきだしになつた滑な腕がどれもよく実がいつて若若しく美しい。牛蒡、もろこし、さつま芋のはた。↓まへの綿畑には、荒い紺飛白の着物をきて手拭をかぶつた女たちが、這ふやうな恰好をして、草をとつてゐる。牛蒡・もろこし・さつま芋のはた。」

「そして大きな口を結んで力みかへつてゐるがいつかう丹田に力がはひつてゐない。ブライアンの顔に似てゐる。私は吹き靡いて白くみえる無花果や、桐や、葦を眺めながら気もちよく風にあたつてゐる。↓そして大きな口を結んで力みかへつてゐるが、いつかう丹田に力がはひつてゐない。私は、吹き靡いて白くみえる無花果や、桐や、葦を眺めながら、気持よく風にあたつてゐる。」

「そこには嫁さんが編笠をかぶつて畑をうなつてゐた。↓そこには作さんが編笠をかぶつて畑をうなつてゐた。」（以下「嫁さん↓作さん」の修正が三箇所あり）

「とほせんぼをしたり、ひとの足のうへへ裸足の足でのつたりするのてなかなか道がはかどらない。↓とほせんぼをしたり、ひとの足のうへへ裸足でのつたりするので、なか／＼道がはかどらない。」

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 「聲↓こえ」

④注加筆 なし

⑤挿絵 あり 牧溪筆「燕」

(二)「風呂(自修文)」「国文」〈巻一中篇補遺〉富山房、一九二八年九月

出典『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

①文章省略など大きな本文異同 なし

②ルビ加筆 「風気」「軀寝」「際どい」「葉缶」「小さい方」「婆羅門」「神妙」「母屋」「一郭」「三宝荒神」「脱場」「流場」「闇穴道」「爽快味」

③ひらがな表記への修正「寄居蟹↓やどかり」「竈↓かまど」「粗朶↓そだ」「土耳其風呂↓トルコ風呂」

④注加筆 「余儀なく しかたなく」「結句 つまり。けつきよく。」

「婆羅門 Brahman 印度に起った宗教の名。仏教より古い。」
「神妙に すなほに。」「母屋 家人のつねに住む家。」「そだ(粗朶) きりとつた木の枝。」「三宝荒神 真言、天台兩宗の修験部及び日蓮宗の祈禱部で祀る神。民間では台所にまつてかまどの神とする。」「みたたまらない 動かずにじつとしてはゐられない。」「トルコ風呂 一種の蒸し風呂。」

⑤挿絵 なし

(三)「孟宗の蔭(自修文)」「国文」〈巻一後編補遺〉富山房、一九二八年九月

二八年九月

出典「孟宗の蔭」『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

①文章省略など大きな本文異同 「南天燭の実↓南天の実」

②ルビ加筆 「戦がず」「小やみ」「真紅」「屈強」「履された」「更紗」「後馳せに」

③ひらがな表記への修正「雫↓しづく」「罍↓ねぐら」

④注加筆 「幹ぐるみ みぎうと。」「エルサレム Jerusalem アジ

アトルコのシリアの都市。キリストの墓がある。ここはキリスト教徒がこの霊地をムハメット教国から奪回した時のその欲にたとへてゐる。」「つゝ立つ まつすぐに立つ。」「春日燈籠 奈良の春日神社にある燈籠にかたどつて作つたもの。」

⑤挿絵 あり 阿部春峰筆「静寂」

(四)「絵」『昭和国語読本』〈巻五〉育英書院、一九二八年二月

出典『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

①文章省略など大きな本文異同 「歪形↓三角」

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正「我楽多↓がらくた」「欧羅巴↓ヨーロッパ」

④注加筆 「フェヤリーランド 御伽の国。」

⑤挿絵 なし

(五)「沼のほとり」『中学新国文』〈巻三〉帝国書院、一九三一年九月

出典『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

①文章省略など大きな本文異同

「私は平凡な人の好い女のやうにこの沼への自然を愛する↓私は、この沼辺の自然を愛する」

「この酷暑のくるまへに、夏にしては涼しすぎる、蒸し暑さのなかに冷えをさへ覚えるほどの不順な天気がつづいた。(中略)私はそれらの変幻極まりない自然の相にいかにも楽しく眺めいつたことであらう！」(以上省略)

「その風の強くない日には沼のここかしこに雨に濡れて『もく』をとる舟がでる。↓風の強くない日には沼のこ、かしこに雨に濡れて『もく』を採る舟がでる。」

「草刈りよりは骨が折れるらしいがそのかはりよくきくのだから。↓草刈りよりは骨が折れるらしいがそのかはりよい肥料になるのださうだ。」

「私はことに夕暮をなつかしんで、縁に腰をかけ、柱に背をよせてさまざまの思いにふけりながら、無花果の葉が雨にぬれて、螢の火のつめたくもえそめるまでも残りをしくながめてゐた。そんなにして永いこと憂鬱なすさまじい日がつづいたのちこの頃の酷烈な暑さがきた。↓私は夕暮をなつかしんで、縁に腰をかけ、柱に背をよせてさまざまの思にふけりながら、無花果の葉が雨にぬれて、螢の火のつめたくもえそめるまでも、残りをしくながめてゐる。ながいあひだ、憂鬱なすさまじい日がつづいた。それがすきて、この頃の酷烈な暑さがきた。」

「たうなす、百合の花」(一行省略)

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 「蟻斬↓ばつた」

④注加筆 なし

⑤挿絵 あり

(六)「鳩のねぐら」『帝国新国文』(巻二)帝国書院、一九三三年一月

「孟宗の蔭」『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

①文章省略など大きな本文異同

「あるときことのほか静にしんしんとふけた晩があつた。↓ある

とき、ことのほか静かにしんとふけた晩があつた。」

「風もそよがず、雫の音もきこえず、戸の節穴からさしこむ光がいつまでたつても黄みを帯びてこない。私はまた霧がおりたのかしらと思つた。↓風もそよがず、往來の音も聞えず、戸の節穴からさしこむ光がいつまでたつても黄色みを帯びてこない。私はまた霜がおりたのかしらと思つた。」

「彼女は昨夜どこにどうして夜をあかしたであらう。↓昨夜どこにどうして夜をあかしたであらう。」(以下「彼女」の省略二箇所あり。)

「南天燭の実↓南天の実」

「ひよひよと風をきる音↓ひゅうひゅうと風をきる音」

「つつ立つてゐる↓立つてゐる」

「それを見て彼女はすぐについてしまつた。↓それを見て鳩はすぐに行つてしまつた。」(以下「彼女↓鳩」の修正が三箇所あり)

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 「おくれ馳せ↓おくればせ」

④注加筆 「エルサレム パレスチナの首府 キリスト教の聖地」

⑤挿絵 なし

(七)「わが家の庭」『帝国新国文』(巻九)帝国書院、一九三三年一月

出典『しづかな流』(岩波書店、一九三二年六月)

①文章省略など大きな本文異同

「けれども↓とはいえ」「しかし↓とはいえ」

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 「好かない↓すかない」

④ 注加筆 なし

⑤ 挿絵 なし

(八) 「夕がたの遊」・短歌一首『国語』〈巻一〉岩波書店、一九三四年八月

出典『銀の匙』(岩波書店、一九二六年四月)・短歌『しづかな流』(岩波書店、一九三二年六月)

① 文章省略など大きな本文異同

「あの静かな子供の日の遊びを心からなつかしくおもふ。↓静かな子供の日の遊を心からなつかしくおもふ。」

「ちよんがくれにも、めかくしにも、をか鬼にも、石蹴りにもあきたお国さんは、前髪をかきあげて汗ばんだ額に風をあてながら『こんだなに遊びませう』といふ。私も袂で顔をふきながら『かあごめ かごめ をしませう』といふ。↓ちよんがくれにも、めかくしにも、をか鬼にも、石蹴りにもあきた友達は、汗ばんだ額に風をあてながら『こんだなに遊ぼう。』といふ。私も袖で顔をふきながら、『かあごめかごめをしよう。』といふ」

「お国さん↓友達」(三箇所あり)

「あのほのかなまんまるの国に兎がひとり餅をついてゐるとは無垢にして好奇心にみちた子供の心になんといふ嬉しいことであらう。↓あのほのかな、まんまるの国に、兎がひとり餅をついてゐるとは、なんとといふ嬉しいことであらう。」

「伯母さんが『せんだにお帰りよ』といつて迎ひにきてつれて帰らうとするのを一所懸命足をふんばつて帰るまいとすればわざとよろよろしながら↓伯母さんが、『こはんだからお帰りよ。』と

いつて迎へにきてつれて帰らうとするのを、一生懸命足をふんばつて帰るまいとすれば、伯母さんはわざとよろよろしながら」

「あすまた遊んでちやうだいえも↓あすまた遊んでちやうだい。」

「わが庵に 花はなけれど さみしくもなし おとなりの菜のはいまさらなり — 中勘助—」(『中勘助全集』〈第一四巻

詩歌〉岩波書店一九九〇年一月) 未収録短歌

② ルビ加筆 なし

③ ひらがな表記への修正 なし

④ 注加筆 なし

⑤ 挿絵 なし

(九) 「山の手の家」・短歌一首『国語』〈巻一〉岩波書店、一九三四年八月

出典『銀の匙』(岩波書店、一九二六年四月)・短歌『しづかな流』(岩波書店、一九三二年六月)

① 文章省略など大きな本文異同

連続した文章ではなく、『銀の匙』前篇第五・第十・第十一・第十二・第二十の冒頭の文章を必ず含み、文章を繋げた構成になつてゐる要約版。

「私の生れたのは神田のなかの神田ともいふべく、火事や喧嘩や酔っぱらひや泥坊の絶えまのなところであつた。↓私の生まれたのは神田のなかの神田ともいふべく、火事や喧嘩の絶え間のなところであつた。」

「病身者の私はしよつちゆうお医者様の手をはなれるまがなかつたが、仕合せなことには烏犀角の東桂さんが間もなく死んだので

代りに『西洋医者』の高坂さんにみてもらふやうになり、東桂さんが一生懸命ふき出さした胎毒は西洋の薬できれいに洗はれてぢきよくなつてしまつた。↓病身者の私はしよつちゆうお医者様の手を離れるまがなかつたが、筋向ふの漢方医が間もなく死んだので、代りに『西洋医者』に見て貰ふやうになつた。」

「そのうち 私と母の健康のためにどうでも山の手の空気のいいお医者様が『どうでも山の手の空気のいい、ところへ越さなければ』といふので」

「いよいよひき移るといふ日にはみんなして私に もうこの家へは来られないのだ」といふことをよくよくいつてきかせたが、私は出入りの者が手伝ひにきて大騒ぎするのが面白く↓いよ／＼ひき移るといふ日には、みんなして私に、『もうこの家へは来られないよ』といふことをよく／＼いつてきかせたが、私は引越の賑やかさが面白く」

「おほかた旧幕時代から代々住みつづけてゐる士族たちで、世がかはつて零落はしたがまだその日に追はれるほどじめな有様にはならず、つつまやかにのどかな日をおくつてゐる人たちであつた。それに人家もすくない片田舎のことゆゑ、近所同士は顔ばかりか家のなかの様子まで知りあつて、お互に心やすくしてゐる。」

↓おほかた旧幕時代から代々住みつづけてゐる士族たちで、世がかはつて零落はしたが、つつまやかにのどかな日を送つてゐる人たちであつた。それに人家もすくない山の手のことゆゑ、お互に心やすくしてゐる。」

「暗い陰気な玄関のわきにはゆづりはの木があつたが、その葉も

赤いちくも氣にいつた。↓玄関のわきにはゆづりはの木があつたが、その葉も、赤いちくも氣にいつた。」

「私はいくつとなくぶらさがつた瓢箪をみて大喜びであつたが、伯母さんは苗売りにまんまと一杯くはされたのをくやしがつて、ろくに世話をしてやらなかつたもので↓私はいくつとなくぶらさがつた瓢箪をみて大喜びであつたが、伯母さんはくやしがつて、ろくに世話をしてやらなかつたので」

「畑をめぐる杉垣のくろには祖母の栗と私が拾つてきてまいた胡桃が芽を出してゐる。↓畑をめぐる杉垣の畔には祖母が孫たちにと植ゑ残しておいた栗と私が拾つて来て蒔いた胡桃が芽を出してゐる。」

「巴旦杏の古い木があつて雲のやうに青白い花をさかせたが、それは私たち兄弟のなよりの楽しみで、鳥のくるのを氣にしては追ひにいつた。大きな実が鈴なりになるので枝がしなつて地びたについてしまふ。背のとどくところは手でちぎり、高い枝のは打ち落して重たい箆をかかへて帰る。↓巴旦杏の古い木があつて、雲のやうに青白い花を咲かせた。大きな実が鈴なりになるので、枝がしなつて地びたについてしまふ。鳥の来るのを氣にしては追ひにいつた。背のとどくところは手でちぎり、高い枝のは打落して、重たい箆をか、へて帰る。それは私たちの何よりの樂であつた。」

「おとなりの 菜の花は種となりけり さきのこる 白豌豆のすずしきよ —中勘助— (『中勘助全集』(第一四卷 詩歌) 岩波書店一九九〇年一月) 未収録短歌

②ルビ加筆 なし

③ ひらがな表記への修正 「類↓たち」

④ 注加筆 「神田 東京市神田」「小石川 東京市小石川区」ここでは小石川区小日向水道町の高台を指す」

⑤ 挿絵 なし

(一〇) 「沼のほとり」『新国語読本』(巻三) 星野書店、一九三四年

八月

出典 『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

① 文章省略など大きな本文異同

「これといつて見どころのない、通りすがりの者などは寧ろ失望させるやうなこのへんの景色は、永いあひだここに落ちついて朝夕によくその味をかみしめる者には、ありふれて地味ではあるがなかなかすてがたい一種のうまみを感じさせる。↓これといつて見どころの無い、通りすがりのものなどは寧ろ失望させられるやうなこの邊の景色は、永い間こゝに落ちついて朝夕よくその味をかみしめる者には、ありふれて地味ではあるが、なかなか捨てがたい一種のうまみを感じさせる。」

「私は平凡な人の好い女のやうにこの沼への自然を愛する。↓私は平凡な、人の好い人物のやうに、この沼への自然を愛する。」

「辰巳のはうから沼のうへを、灰色の雲の大きな塊が鱗のやうに重なりやつて、あとからあとへと低く襲つてくる。↓辰巳の方から沼の上を、灰色の雲の大きな塊が鱗のやうに重なりあつて、あとからあとへと低く襲つてくる。」

「その風の強くない日には沼のここかしこに雨に濡れて『もく』をとる舟がでる。↓風の強くない日には、沼のこゝ、かしこに雨に

濡れてもくをとる舟がでる。」(以下「もく」の表現が二箇所あり)「草刈りよりは骨が折れるらしいがそのかはりよくきくのなさうだ。↓草刈りよりは骨が折れるらしいが、そのかはりよい肥料になるのなさうだ。」

「その夏の日が蟬の歌におくられて暮れてゆけば、空には露のやうに星がきらめきはじめる。↓夏の日が蟬の歌に送られて暮れてゆけば、空には露のやうに星がきらめきはじめる。」

「こんもりと繁りあつた夏木のあひだを螢がすいすいととぶ。↓こんもりと繁りあつた夏木の間を螢がすいすいととぶ。」

「机のうへにおいた洋燈のまはりには蟋蟀、あわふき、こくざう蟲、よこばひ、羽蟻、かなぶんぶん、そのほか、蟻や、蜻蛉や、ががんぼや、灰みたいな細かい蟲がまつ黒に群つてくる。↓机の上に置いた洋燈のまはりには灰みたいな細かいいろいろな種類の蟲が、まつ黒に群つてくる。」

「彼らは随分読書や執筆の邪魔になるし、時にはそのためをやめてしまふことさへあるけれど、私は夏を愛するあまりに彼らをさへ屢は愛すべきものとして快く眺めてゐる。↓彼等は随分読書や執筆の邪魔になるが、私は夏を愛するあまりに、彼等をさへ屢、愛すべきものとして快く眺めてゐる。」

② ルビ加筆 なし

③ ひらがな表記への修正 なし

④ 注加筆(意味・フリガナなし) 「辰巳」「変幻」「潔癖」「憂鬱」「赫奕」

⑤ 挿絵 あり「沼の舟」

(一一)「五月の日記」『新撰国語読本』(巻一) 明治書院、一九三五

年九月

出典『しづかな流』(岩波書店、一九三二年六月)

①文章省略など大きな本文異同

「私は目のあたり見るところの人間といふ動物をこれほどな感興と愛隣をもつて眺めたことがたびたびあつたであらうか。↓私には、目のあたり見るところの人間といふ物をこれ程な感興と愛隣をもつて眺めたことが度度あつたであらうか。」

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 「冴え↓さえ」

④注加筆 なし

⑤挿絵 なし

(一二)「田園日記」『新編国語読本』(巻一) 右文書院、一九三六年

六月

出典『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

「裸足で遊んでゐる子供が野生を帯びて濁つた声で↓裸足で遊んでゐる子供が、野生を帯びた濁つた声で」

「一羽づつ別別によぶやうにあをむいてどなつてゐる。↓一羽づつ別々によぶやうに、あふむいてどなつてゐる。」

「お母さんなる嫁さんは針仕事をしながら↓お母さんは、針仕事をしながら」

「まへの綿畑には荒い紺飛白をきて手拭をかぶつた女たちが這ふやうな恰好をして草をとつてゐる。肘までむきだしになつた滑な腕がどれもよく実がいつて若若しく美しい。牛蒡、もろこし、さ

つま芋のはた。↓前の綿畑には、荒い紺飛白の着物をきて手拭を被つた女たちが、這ふやうな恰好をして、草をとつてゐる。牛蒡・もろこし・さつま芋のはた。」

「そして大きな口を結んで力みかへつてゐるがいつかう丹田に力のはひつてゐない。ブライアンの顔に似てゐる。私は吹き靡いて白くみえる無花果や、桐や、葦を眺めながら気もちよく風にあたつてゐる。↓そして大きな口を結んで、力みかへつてゐるが、いつかう丹田に力のはひつてゐない。私は、吹靡いて白く見える無花果や、桐や、葦を眺めながら、気持よく風にあたつてゐる。」

「空は晴れわたつた。美しい日である。↓空は晴れわたつた美しい日である。」

「そこには嫁さんが編笠をかぶつて畑をうなつてゐた。↓そこには、作さんが編笠をかぶつて、畑を打つてゐた。」(以下「嫁さん↓作さん」の修正が三箇所あり)

「とほせんぼをしたり、ひとの足のうへへ裸足の足でのつたりするのてなかなか道がはかどらない。↓とほせんぼをしたり、ひとの足のうへに裸足でのつたりするので、なか／＼道がはかどらない。」

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 なし

④注加筆(意味・フリガナなし)「蒸風呂」「はひつた」「裸足」「野性」「あふむいて」「飛白」「恰好」「こしらへ」「お猪口」「あひだ」

「力む」「いつかう」「丹田」「いかう」「唯々諾々」「丘一岡」

⑤挿絵 あり「つばめ」

(一三)「思ひ出三つ 木霊」『中等大日本読本 新制版』(巻一)大

日本図書、一九三七年六月

出典『銀の匙』(岩波書店、一九二六年四月)

①文章省略など大きな本文異同

『銀の匙』後篇第十八の冒頭二文「十七の年の夏を私はひとりでのそのじぶん親しくしてゐた友達の家を別荘にすごした。それは先に兄につれられていつた美しく寂しい半島の、その海岸の小山のふところにこつとりとたつた草ぶきの建物で、一切の世話は近所に住んでゐる独り者の花売りの婆さんがしてくれることになつた。」に十九を続けた構成になつてゐる。

②ルビ加筆 「木霊」こだま 「讓葉」ゆづりは

③ひらがな表記への修正 「降り↓くだり」

④注加筆 「隼 鷹の一種。我が国では各地に棲息する。性質は勇猛。小鳥等を捕食する。」「讓葉 交讓木とも書く。木の名。新葉が出てから旧葉が落ちるので、この名である。」

⑤挿絵 なし

(一四)「田園日記」『新中学国文』(巻一)目黒書店、一九三九年一

〇月

出典『沼のほとり』(岩波書店、一九二五年七月)

①文章省略など大きな本文異同

「裸足で遊んでゐる子供が野生を帯びて濁つた声で↓裸足で遊んでゐる子供が野生を帯びた濁つた声で↓

「お母さんなる嫁さんは針仕事をしながら↓お母さんは、針仕事をしながら」

「まへの綿畑には荒い紺飛白をきて手拭をかぶつた女たちが這ふやうな恰好をして草をとつてゐる。肘までむきだしになつた滑な腕がどれもよく実がいつて若若しく美しい。牛蒡、もろこし、さつま芋のはた。↓まへの綿畑には、荒い紺飛白をきて手拭をかぶつた女たちが、這ふやうな恰好をして、草をとつてゐる。牛蒡・もろこし・さつま芋のはた。」

「そして大きな口を結んで力みかへつてゐるがいつかう丹田に力がはひつてゐない。ブライアンの顔に似てゐる。私は吹き靡いて白くみえる無花果や、桐や、葦を眺めながら気もちよく風にあたつてゐる。↓そして大きな口を結んで力みかへつてゐるが、いつかう丹田に力がはひつてゐない。私は、吹き靡いて白くみえる無花果や、桐や、葦を眺めながら、気持よく風にあたつてゐる。」

「とほせんぼをしたり、ひとの足のうへへ裸足の足でのつたりするの足のかかなか道がはかどらない。↓とほせんぼをしたり、ひとの足のうへへ裸足でのつたりするので、なか／＼道がはかどらない。」

②ルビ加筆 なし

③ひらがな表記への修正 なし

④注加筆 なし

⑤挿絵 あり「つばめ」

四 考察

(一) 全体的な傾向

表1の通り、全一四の教科書教材化された中勘助文学作品の内訳

は「沼のほとり」七件、「銀の匙」三件、「孟宗の蔭」二件、「しづかな流」二件という結果となった。

中勘助文学の特徴である日記体随筆作品を出典とする教材が一件と大部分を占めた。更に詳細に見ていくと「沼のほとり」典拠の(一)(二)(三)(四)は出典『沼のほとり』三八～四二頁、いずれも田園地帯を背景に燕の子育て、鶏の子育て、農家の嫁さんの子育てが動物・人に隔たりのない視点で描かれている場面である。同様に「沼のほとり」典拠の(五)(一〇)は出典『沼のほとり』四二(四三)～四六頁、(一)(二)(三)(四)で取り上げた箇所続く文章である。作品の背景にある手賀沼で「もく」という農地の肥料になる水草を採る農夫の姿と現地の夏の文物を表現している。「孟宗の蔭」典拠の(三)(六)は出典『沼のほとり』一三五～一三八頁、「孟宗の蔭」冒頭「大正二年一月一日 夜。……」に続く文章である。両教材は雪に押し倒された鳩のねぐらについての描写である。「孟宗の蔭」は、当時、下谷区上野桜木町にあった上野寛永寺山内真如院に仮寓していた一九二〇～一九一六年を描いた日記体随筆作品である。「孟宗の蔭」という題名に象徴されるように、(三)(六)に描かれた当時の東京上野の降雪・孟宗竹藪への積雪等、冬の東京の自然が鳩の身の上を案じる気持ちと共に記されている。

それぞれ、手賀沼と平塚を背景にした日記体随筆作品の「沼のほとり」「しづかな流」が、場所柄自然描写に溢れていることは言うまでもないが、明治時代の東京やその郊外を描いた小説「銀の匙」の中でも「山の手の家」「木霊」はとりわけ自然描写が多い箇所である。

これらの作品が教科書に採択された理由を次の二つの中勘助の自

然描写に触れた先行研究より探っていく。筆者は静岡市中勘助関係資料内に井上生による最も古い中勘助の作品評論の一つである「中勘助氏の作品(一) 自然の頌歌として」『東京日日新聞』(一九二五年九月二十九日)を発見した。その記事中、井上は「中勘助氏の作品はすべて自然の頌歌である。『銀のさじ』『島守』『沼のほとり』それ等の中に読者は閑寂な草木のささやきを聞き、おさないもののみみにゆるされるすべての存在に対する歓喜(原始的な)を知るであらう」と述べた。また、高橋義孝は「解説」『内田百閒 中勘助 坪田譲治集』(日本文学全集23)(新潮社、一九六三年八月)において「『銀の匙』後編第十九章(筆者注 本稿で取り上げた(一三)木霊)で、少年が草の根を分けて、人の行かない岬の峰の一つによじ登って行く場面がある。心の中に、まだ原始の月影が消え失せてはいない少年は、これを最後と、もう一度、ものみなの源を、始源の泉を覗き込もうとする。そういう時に、少年は時として不思議なピクニックを試みるのである。人の滅多に行かない山や谷へひとりで出かけて行く。そしてもう一度、人間の古い同胞、木や草や雲や海と睦み合おうとする。あるいはこの精神的ピクニックこそ本当の成人式かも知れない。そして作者はそのような成人式の模様をこの一章において見事に描き出している。そういう山、そういう谷は、その人間にとつては楽しい秘密であって、この秘密の楽しさは本人以外には誰にも解らない。しかし多くの人間がそういう体験をしているに違いないと思う」と(一三)「木霊」の鑑賞のポイントを示した。

中勘助が東京第一高等学校(以下、一高と略す)及び東京帝国大学(以下、東大と略す)において英語教師夏目金之助の教え子で

あったことを契機に、一高・東大時代の友人・安倍能成・小宮豊隆・野上豊次郎らを含むホトトギス派（俳諧雑誌『ホトトギス』の同人等）が作家漱石を囲んだ木曜会のメンバーであったことは、漱石の推薦による一九一三年四月の「銀の匙」『東京朝日新聞』連載を通しての本格的文壇デビューの逸話からも良く知られている。そこでは、漱石の批評眼に支えられた文章鍛錬の結果、正岡子規の俳諧論「写生」に発した「視覚的・印象的な事物把握と表現」（松井利彦「明治俳句外観」『俳句』〈新研究資料 現代日本文学六〉明治書院、二〇〇〇年）を命とする「写生文」の名作が多く誕生した。そのような文学会の雰囲気の中で、中勘助による作品が自然描写に優れ、日記体随筆の中に（二）で扱う短歌に代表される自然の推移を詠む短歌が多く含まれる傾向が生じたことは当然の結果であったと言えよう。

以上の言説より、本論で取り上げた中勘助作品は旧制中学校一・三年生という思春期ただなかの少年少女にとつて、自然の頌歌・原始的な歓喜を描いた点で共感しやすい作品であり日本文学史における「写生文」の系譜を引き継いだ自然志向の作品だと位置づけられる。

（二）岩波書店刊『国語』教科書掲載「銀の匙」及び全集未収録短

歌について

岩波書店創業者である岩波茂雄と中勘助が東京帝国大学時代に同級生であったことを契機として中勘助の戦前の作品の大部分が岩波書店の雑誌『思想』を初出とし、単行本の大部分が岩波書店発行であったことはよく知られている。『銀の匙』も『東京朝日新聞』連

載（前篇一九一三年四月八日～六月四日、後篇「つむじまがり」の題で一九一五年四月七日～六月二日）後、一九二一年一二月、現在仮綴じ本と呼ばれる単行本が岩波書店より出版された。その後、大幅に改訂された現行岩波文庫版の底本となる単行本が一九二六年四月に岩波書店より出版された。

以上のような背景が「銀の匙」にあるとしても、岩波書店刊『国語』教科書掲載「銀の匙」には他の教科書とは比較にならない大幅な修正が加わっており、引用元とは全く別作品と言っても良いような作品となっている。その一点目が、（九）における、連続した文章ではなく、『銀の匙』前篇第五・第十・第十一・第十二・第二十の冒頭の文章を必ず含み、文章を繋げた構成になっている要約版であること。二点目が（八）における主人公の遊び相手が「お国さん（女児）」から「友達」へと変化していること。三点目が（八）における伯母さんの会話文における標準語化。四点目が（九）における神田・小石川住人に対するネガティブな印象の表現を削除したことである。五点目が（八）・（九）の末尾に記された『中勘助全集』（第一四巻 詩歌）未収録短歌の存在である。

同教科書の教師用指導書である『国語 学習指導の研究』（巻一・巻三）（岩波書店、一九三三年）を参考に確認していくと次の通りとなる。

（九）に関する一点目だが、「山の手の家」という題名にあるように小石川の転居先の家、特にその自然環境の様子を中心に教材を設定したため、転居するまでの解説的な経緯は省略したものと推測される。『国語 学習指導の研究』（巻三）の「二 備考 参考資料」には省略理由は記されていないものの、省略された文章の全文が記

されている。四点目としての神田にまつわる「酔っ払いや泥坊」、小石川にまつわる「みじめな有様」はその地域住人に対するネガティブな印象の表現であることから教科書掲載には不相応と判断し省略したと考えられる。『国語 学習指導の研究』の「註解」には「火事や喧嘩の絶え間のない」には「享保の頃には放火犯や泥坊が非常に多かつたやうなこともあつて、追々貯蓄を軽蔑する氣風を生じ、江戸児は『宵越の錢を持たない』ことを誇るやうになつた。」と江戸時代の神田界隈の氣風解説が収録されている。(八)における二点目の「お国さん(女兒)」の「友達」化及び三点目の「伯母さん」の会話文の標準語化であるが、教科書が全国版であることから一般的表現及び標準語を基準にしたと想定される。『国語 学習指導の研究』「解題」ではこれらの教材の位置づけとして「追憶されている幼時の生活そのものが鮮明に生き生きと描出されてゐる」点を挙げ、「その純真な童心を表現した文芸的教材であることはいふまでもないが、同時に、をさな遊びとそれにつながつた幼時の言葉の愛を呼び覚まし、随つて心の故郷に対する思慕を深らしめる点で、国民的教材としての意義を持ち得る」と解説した。「国民的教材」(筆者注)「日本精神の涵養であり、国民性の陶冶」に資する教材」という視点から多くの小国民に理解されやすい表現をこれらの教材で用いたと推測される。

五点目の『中勘助全集』(第一四巻 詩歌)未収録短歌の解題については、『国語 学習指導の研究』(巻一・巻三)には次のように記されている。

「わが庵にの歌」わが住む庵には花もなく、まことに簡素な

有様であるが、さてそれが為にもたりになく興趣の心に来るものが全くないといふのではない。垣根を接して隣家の菜の花がいま盛りに咲いて、この侘住居の心にしづかなあかるさを与へて呉れてゐる。これも一興趣である。(中略)淡々と詠みすてた歌で、一種俳味に通ずる調べがある。

「おとなりのの歌」嘗ては「いまさかりなり」と賛美したおとなりの菜の花が、今は既に種となつてしまつたといつて、この小さい美しいものの推移を、いかにも感慨深く詠歌し、同時に、そこに見出された、わづかに咲きのこつてゐる白豌豆のすがすがしさ、さわやかさを嘆美している。

以上の二首は中勘助の短歌として『中勘助全集』(第一四巻 詩歌)未収録である上に、先行研究が三件に限られ今まで短歌解題がされてこなかつた中勘助短歌研究史においても貴重な指摘といえよう。

五 おわりに

本研究成果として、第一に本研究の基礎となつた拙稿「教科書教材としての中勘助文学作品について」(『日本女子大学大学院の会 会誌』(二〇一九年一〇月)発表時に比し、「中勘助文学作品の戦前教科書教材一覧」に示された教材が一〇件から一四件と今回四件増

加し全ての教材を目視できたことである。第二に教材の本文異同を詳細に確認した結果、『銀の匙』を出典とする『国語』(巻一・巻三)(岩波書店)収録(八)(九)の以外の教材では出典の本文と大きな

異同が認められなかった。(八)(九)については、その大きな本文異同の理由は示されなかったものの教師用指導書『国語 学習指導の研究』(巻一・巻三)には参考資料として省略全文が示され、更には解題・語句の註解・文章の読み方・鑑賞の手引きが示されるなど、教材としての完成度を高めようとする教科書編集者の目的が垣間見られる。

(八)(九)の教材の最大の特徴として『しづかな流』初出の『中勘助全集』(第一四巻 詩歌)未収録短歌の掲載が挙げられる。『国語 学習指導の研究』(巻一・巻三)掲載のこれら短歌二首の解題は、未だ説明が進んでいない中勘助短歌研究において大変貴重な指摘である。同書にはこれら二首が一連・二連として中勘助の詩集『琅玕』(岩波書店、一九三五年三月)収録「わが庵に花はなけれど」の題で詩として登場する旨、記載があった。『琅玕』を確認したところ「おとなりの菜のはな↓おとなりの菜の花」と表記が一箇所異なることを確認した。短歌から詩への改作という点で漱石が取り組んだ「俳体詩」の影響も垣間見られ中勘助の短詩系文学を論じる上でのエポック的短歌と位置付けられる。本教科書発行後の一九三八年に中勘助は新万葉歌人に推薦された。自然描写に優れた中勘助の日記体随筆作品「沼のほとり」及び「しづかな流」収録短歌の内、一四歌は太田水穂・北原白秋・窪田空穂・佐々木信綱・斎藤茂吉・釈道空・土岐善麿・前田夕暮・与謝野晶子・尾上柴舟が審査員を担った『新万葉集』(巻六)(改造社、一九三八年)に収録されているが、未だ解題も進んでいない状況であることから、今後の課題としたい。また中勘助の「銀の匙」「孟宗の蔭」「沼のほとり」「しづかな流」といった作品が教科書教材として採用される背景には、作品に通底

する「写生文」の系統をひく自然の頌歌、原始的な歓喜を描いた点、純真な童心を表現した点、心の故郷に対する思慕を深らしめる点が挙げられる。これらが、戦後の教科書教材においてどのように評価されたのか更に探求していきたい。

注記

- (1) 『斎藤孝特別授業 銀の匙 中勘助』(NHK 100分名著 読書の学校) (NHK 出版、二〇一九年)に全四講の内容が記された。
- (2) 「教科書教材としての中勘助文学作品について」(『日本女子大学大学院の会』会誌)(二〇一九年一〇月)収録表2「中勘助文学作品の戦後教材一覧」掲載。
- (3) 公文教育研究会編『くもんの読書コース・G』(くもん出版、一九八八年)
- (4) 二〇一九年九月二日に同作品の同教材としての採用理由について公文教育研究会指導部グローバル指導チーム原田智美氏より「作品の魅力も当然ありますが、あえてこの作品に限った理由を挙げるならば灘高校の橋本武先生による「銀の匙の授業」です」との回答をいただいた。
- (5) 松井利彦は、漱石の「吾輩は猫である」「草枕」、高浜虚子「鶏頭」、長塚節「土」、伊藤左千夫「野菊の墓」を同書で挙げた。
- (6) 渡辺外喜三郎「中勘助の短歌」(『日本短歌』(二〇巻六号)一九五一年七月・赤羽淑「中勘助の短歌」(『中勘助全集月報』(第一四巻)岩波書店、一九九〇年一月)・本林勝夫「文人たちのうた―8―中勘助」(『短歌研究』(四九巻九号)一九九二年九月)
- (7) 同書収録一四歌は次の通りである。
葛飾のあびこの岡のぼつぼどりぼつぼと鳴けばわれはさびしも
日くれば沼べの小田のはさ竹に冬こふゆこと笛吹く木枯
春なれど赤はらつぐみきて鳴けば葛飾野べはいとどさびしき
朝日さす唐菜の畑のしやうごんに二十五菩薩あまりきまさね
葛飾の沼べに秋の風ふけばもろこしの穂もさびしきものを
あしびきの山もただよはすさみだれの相模の国をわれはめづるかも
潮の音はわが荒魂のをたけびかききくらせどもききのあかなく

松山にひとりころがる松かさはひとりなれどもさびしからぬも
日くれて海かなし沖にかづくむら鳥を友とはもへどへにはよらぬかも
秋鳥の叫ぶやいづこあれ畑に茄子のから吹く山おろしの風
えらえらと日は燃ゆれどもちぢくれて秋はさびしき赤唐辛
いとど鳴く草ふか野らのすてかぼちや黄ばみ蟲ばみ秋たちにつけり
あを紫蘇の花に蜜蜂つどひきてつぶらむらさきほろほろ散るも
春風をぬくみのどけみほくらほくら耳垢さらふこの日向かな

謝辞

国立教育政策研究所教育図書館にはデジタル資料の提供など大変にお世話になりました。公文式太尾堤教室天山昌代先生・公文教育研究会原田智美氏には、注記(4)に記した拙い問いに対して真摯に対応いただきました。ここに感謝申し上げます。

本稿は科研費二〇一九年度基盤研究(c)19K00329の研究成果の一部である。

表1 「改訂版 中勘助文学作品の戦前教材一覧」

No.	教材名	教科書名	巻数	出版者	発行年	出典	備考
1	田園の二日	昭和国語読本	巻一	帝国書院	1928年9月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.38-42
2	風呂(自修文)	国文：中学校用	巻一 中篇	富山房	1928年9月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.98-103
3	孟宗の蔭 (自修文)	国文：中学校用	巻一 後篇	富山房	1928年9月	「孟宗の蔭」 『沼のほとり』	原著 pp.135-138
4	絵	昭和国語読本	巻五	育英書院	1928年12月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.125-128
5	沼のほとり	中学新国文	巻三	帝国書院	1931年9月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.43-46
6	鳩のねぐら	帝国新国文	巻三	帝国書院	1933年1月	「孟宗の蔭」 『沼のほとり』	原著 pp.135-138
7	わが家の庭	帝国新国文	巻九	帝国書院	1933年1月	『しづかな流』	原著 pp.35-38
8	夕がたの遊	国語	巻一	岩波書店	1934年8月	『銀の匙』	短歌一首 『しづかな流』 p.421
9	山の手の家	国語	巻三	岩波書店	1934年8月	『銀の匙』	短歌一首 『しづかな流』 p.431
10	沼のほとり	新国語読本	巻三	星野書店	1934年8月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.42-46
11	五月の日記	新撰国語読本	巻一	明治書院	1935年9月	『しづかな流』	原著 pp.168-171
12	田園日記	新編国語読本	巻一	右文書院	1936年6月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.38-42
13	木霊	中等大日本読本 新制版	巻一	大日本図書	1937年6月	『銀の匙』	原著 pp.289-290 pp.297-300
14	田園日記	新中学国文	巻一	目黒書店	1939年10月	「沼のほとり」 『沼のほとり』	原著 pp.38-42

注：出典の書誌情報は本文参照のこと。